

放送日： 平成 20 年 11 月 9 日

タイトル： 盲腸について

担当者： 医師 瀬戸山 博

一般に盲腸あるいは盲腸炎といわれていますが、医学的には「急性虫垂炎」が正式な病名です。大腸の一部である盲腸という部分の下端から突出した虫垂突起が炎症を起こす病気です。十分な検査方法がなかった時代には、手術をすると、虫垂の炎症が盲腸にまで及んでいて、盲腸がいつも腫れていたため、盲腸炎と言われました。

急性虫垂炎の原因については様々な説があり、不明と言っているでしょう。しかし、一生涯のうち 15 人に 1 人の割合で虫垂炎にかかるといわれておりますので、これからお話する急性虫垂炎の症状を覚えておいていただきたいと思います。

虫垂炎の典型的な症状は、みぞおちやお臍の周りの腹痛で始まり、吐き気がしたり、あるいは本当に嘔吐したりします。また、食欲が低下したり、発熱が起こります。数時間から 1 日経つと痛みは右の下腹部に移動してゆき、この部分を手で押さえると激しく痛むようになります。この時期に病院で診断と治療を受けていただければ大事には至りませんが、腹痛を我慢した結果、虫垂の壁が腐って中に膿が溜まった状態になると、本当に「盲腸炎」になってしまいます。さらに進んで虫垂が破れてしまって、膿がお腹の中にひろがった「腹膜炎」になることもあります。特に乳幼児では、虫垂炎が起きると、抵抗力が未発達であるために炎症の進行が早く、腹膜炎に至るケースがありますから、注意が必要です。

診断は、お腹の診察に加え、以前から行われてきた血液・レントゲン検査、さらに超音波やCTスキャンなどの画像検査を行うことにより、正確な診断ができるようになりました。それでも女性の場合は、卵管・卵巣などの病気との区別が難しい場合がありますので、ある程度の画像診断ができる施設を受診されることをおすすめします。

治療法は、開腹手術で虫垂を摘出することになります。人間の内臓というものは必要だから存在するわけなのですが、虫垂に限っていえば、なくなっても、日常の生活には何ら問題はありません。また、虫垂の周りに膿が溜まっていたり、腹膜炎の状態になってからの手術になると、お腹の中から膿を体外に導き出すための管を一時的に入れる必要があります。比較的軽い虫垂炎の手術なら 1 週間以内に退院できるのですが、管を入れる手術になると 2 週間から 1 ヶ月の入院を要することになります。盲腸といえば軽い病気のように考えられがちですが、このように炎症や化膿の程度によっては盲腸といえども重症になることがあるのです。

ですから、持続するお腹の痛みを感じたら早めに診察を受けてください。そうすれば、もしあなたが盲腸にかかった場合、より早く安全に治すことにつながるのです。